MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．１２．１４　発行元
第 536 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

怪盗ルパン「ベスト表」(再掲)

作者・生みの親はモーリス・ルブラン。でも、世の中では登場人物の名前の方がずっとよく知られている。その『怪盗ルパン』の『ベスト表』を再度取り上げておこう。懐かしい作品の題名が勢揃いだ。

冒険・義賊ものの代表作

以前も書いたとおりに、小学生の時にポプラ社・南洋一郎版の『怪盗ルパン』を読んだのが始まり。『シャーロック・ホームズ』より先に『ルパン』を読んだ気がする。

右に『ベスト表』を載せておいた。ルパンがルパンの名前で登場していない作品も含まれているけれどもあまり気にしないでもらって…。「ルパン」の名前が「リュパン」になっている題名もあるが、これは私の読んだ本(創元推理文庫)の題名がそうなっているから。

これらの作品が二十世紀初頭に書かれたことに驚く。南洋一郎版が今もって読み継がれていることにも驚く。これからもずっと残していってほしい作品だ。

《モーリス・ルブランのベスト表》

１．８・１・３
２．奇巌城
３．水晶の栓
４．棺桶島
５．カリオストロ伯爵夫人
６．八点鐘(短)
７．虎の牙
８．二つの微笑を持つ女
９．リュパンの告白(短)
１０．謎の家
１１．緑の眼の令嬢
１２．オルヌカン城の謎
１３．赤い数珠
１４．怪盗紳士(短)
１５．綱渡りのドロテ
１６．リュパンの冒険
１７．金三角
１８．バルタザールの風変わりな毎日
１９．ジェリコ公爵
２０．パール・イ・ヴァ荘
２１．バーネット探偵社(短)
２２．リュパン対ホームズ
２３．特捜班ヴィクトール
２４．カリオストロの復讐

『813』　１９１０年の作。下で取り上げる『奇巌城』の次に書かれた作品。その後に分冊化され、『８１３』と『続８１３』の二冊になっている。私が小学生の時読んだのはポプラ社版・南洋一郎の『８・１・３の謎』。学生になってから読んだ完訳版は新潮文庫の堀口大學訳だったような気がする。(今手元に本は残っていない。)

冒頭に登場するのは「ダイヤモンド王」と呼ばれたケッセルバッハ氏。滞在するパリのホテルの部屋に何者かが入ったような形跡があり、警察のグレル刑事に来てくれるように依頼する。ところが、刑事が訪ねてくる前に「大佐」の名を語ったルパンが入り込み、ケッセルバッハ氏がダイヤモンド以上に重要だと考えている「秘密」を聞き出そうとする。そこで登場するのが「ＡＰＯ　ＯＮ」の不可解文字が書かれた紙。次の日の朝、ケッセルバッハ氏は刺殺された形で発見され、ルパンの名刺も残されていた。部屋に落ちていたレッテルには「８１３」の数字…。ドイツとフランスにまたがる国際陰謀に立ち向かうルパン。謎の殺人魔、ロシア貴族のセルニーヌ侯爵、そしてホームズ…多くの人を巻き込んで。

『奇巌城』　１９０９年の作。ルパンものとしては第三作に当たり、初めての長編となったもの。私が小学校の時に読んだ印象ではルパンはかなり高齢の人のように感じられ、これがルパンの生涯最後の物語なのだと勝手に思い込んだりしていたものだった。

ノルマンジーにあるジェーブル伯爵の館に賊が侵入する場面からスタートする。伯爵が気を失って倒れ、秘書が刺殺されたところを伯爵の姪のレーモンドが発見。その時賊のひとりは逃げだすところだった。レーモンドは急いで壁に掛けられた銃を取り発砲。賊に当たったように見えたのだが…。予審判事や警察が付近を捜索したのだが発見できず。撃たれて傷を負ったのはルパンだったのか…。そこに登場するのが高校三年生の天才少年ボートルレ。新聞記者に紛れて捜査現場に入り込み、ルパンを追い詰めていく。そしてマリーアントワネットが残した暗号なども登場して…。「エギーユ・クルーズ＝奇巌城」の構造が素晴らしい。

ポプラ社版・南洋一郎『怪盗ルパン全集』

１９５８年から１９６１年にかけてポプラ社から最初の１５巻が出版された。当時の小学校の図書館に納められたのがこれ。私が読んだのもこの時の本である。その後１９７１年から１９８０年にかけてボワロ＆ナルスジャック作の新作も加えて全３０巻になった。

フランス語の原書をそのまま日本語に直したものではなく、児童生徒向けということも考えて南洋一郎なりの翻案を加えた文・内容になっている。よってルブランの描いた世界がそのまま表現されているとは限らない。あくまでも南洋一郎の頭の中に作り出された「ルパン像」と考えてよい。